

失くした言葉

高梨
浦野

とある事務所
舞台中央に、古びた接客用のテーブルセット

客入れ
照明、ゆっくりと暗転

音楽

1

照明、ゆっくりと明るくなる
下手側で浦野が鼻唄混じりでコーヒーを入れている

浦野 熱っ。

高梨、登場
音楽、E♭
浦野、高梨に気付かず、こぼしたお湯を拭いている
浦野、ソファアでコーヒーを飲むために、振りかえる
舞台隅に立っている高梨に気付く
浦野、驚き、持っていたカップからコーヒーがこぼれ、自分にかかってしまう。

浦野 うわっ。
熱っ。

浦野、上手側に持っていたカップを置き、かかった箇所を拭く

浦野 ∴

高梨 ∴

浦野 すみません。バタバタと。

高梨 ∴

浦野 あ、お客様、ですか。

高梨 はい。

浦野 あ、そうなんですか。

じゃあ、どうぞどうぞ。
一声かけてくれれば良かったのに。

高梨、立ったまま

浦野 ::

どうぞ。

高梨 ::

浦野 座ってください。

大丈夫ですよ。

座った時点で、お金が発生したりはしないですから。

高梨 ::

浦野 何となく、この状態だと、落ち着かないんで。

高梨 失礼します。

高梨、座る

浦野 ::

浦野、落ち着かない感じで、下手側のコーヒを置いた辺りへ
お客様用のカップを探し、適当なカップを手にし、自分のカップから半分
分けて、ソファの方へ

浦野 どうぞ。

高梨 ありがとございます。

浦野 ::

高梨 ::

浦野 えへへ、お客様ですよ。

高梨 ええ。

浦野 えへへ、

高梨 あなたを見ます。

浦野 ::それは、品定めの。

高梨 まあ、そうですね。

浦野 ::

高梨 良い人ぞうだ。

浦野 ::ありがとございます。

どういったところが。

::

どういったところが、良い人ぞうなんですか。

あまり、そういうこと言われたことないんで。

高梨 上手く言えませんが、そんな気がします。
浦野 ……ありがとうございます。
高梨 ……
浦野 ……
高梨 いただきます。
浦野 どうぞ。

高梨 コーヒーを飲む

高梨 美味しいです。
浦野 安物ですよ。
高梨 ええ。
浦野 ……
高梨 確かに、安物かもしれませんが、絶対に譲れない芯の強さを感じます。
珈琲って、淹れる人の人間性が見えると思いませんか。
浦野 どうなんですかね。
高梨 私は、そう思います。
浦野 そうですか。
……
で、ご用件は。
高梨 ……
浦野 ……
高梨 探してもらいたいものがあります。
浦野 ……
探し物ですか。
高梨 何かを探すことに関しては、とても優れていると聞きました。
なので、あなたなら見つけてくれるんじゃないかと思いました。
浦野 そうですか。
誰から聞いたかは分かりませんが、
そうですね、確かに、優秀な方だと思います。
ですが、当たり前ですが、見つからない場合だってあります。
高梨 もちろん。
浦野 最善は尽くしますよ。
高梨 ありがとうございます。
浦野 俺が言ってること理解できてますか。
高梨 お金ですよ。
浦野 ……
ええ。
高梨 お金のことば、心配しなくても結構です。

高梨、懐から、封筒を取り出し、浦野の方へ差し出す

高梨 とりあえずの前金で。
見つけてくださったら、その倍を、更にお支払いします。

浦野 ∴

浦野、封筒の厚さに違和感を感じながら、ゆつくりと封筒を手にする

浦野 ちょっと待ってください。
なんですかこれ。

高梨 色々、かかるかもしれません。
とりあえずの準備金です。
見つかったも、見つからなくても、結果に関係のないお金です。
好きなように使っていただいて、一向に構いませんよ。

浦野 だから、ちょっと待ってください。

∴

なんですか、この金額。

高梨 足りませんか。

浦野 そうじゃなくて、
∴多すぎます。

高梨 ∴

お金、必要じゃないんですか。

浦野 ∴

金は好きですよ。
そして、生きてる以上、誰だって金は必要です。
金が必要だから、仕事だつてしてます。

高梨 だつたら、

浦野 そういうことじゃなくて、

高梨 ∴

浦野 何を探すんですか。

∴

見つかったら、更にこの倍を払うって言いましたよね。

高梨 ええ。

浦野 俺には、この金額に見合う探し物つてものが、思いつきません。
若しくは、相当にやばいことなのかつてことくらいしか、思えません。

高梨 ∴

浦野 誰にどう聞いてきたか分かりませんが、
やばい仕事はしないんです。

高梨 やばい仕事なんかじゃありませんよ。

浦野 だつたら、

高梨 雨が降りそうでした。

浦野 ::

高梨 そんな曇行きです。

浦野 ::

高梨 古傷つてありますか。

浦野 ::

高梨 雨が降りそうな時つて、古傷が痛むんです。
そんな思いで、ここに来ました。

浦野 ::

高梨 古傷、ありますか。

浦野 ::いえ。

高梨 じゃあ、あなたは、雨が降るまで、雨に気付かないんだ。

浦野 曇や湿度で、ある程度は予想できるでしょ。

高梨 素晴らしい。

浦野 ::

高梨 やばい仕事ではありませんよ。

私にとって、それ位の価値があるということです。

浦野 ですが、俺にとって、この価値があるわけじゃない。
そうでしょう。

高梨 確かに。

浦野 このお金は、受け取れません。

そして、あなたの仕事を引き受けることも、できません。
お帰りください。

高梨 ::

浦野 分相応な仕事つてもものがあります。

それを越えた仕事や、人と、付き合つていくつもりはありません。
お帰りください。

高梨 ::

言葉を探してもらいたい。

浦野 ::

言葉。

高梨 ええ。

失くした言葉を、探してください。

浦野 ::

高梨 お願いします。

高梨、立ち上がる

浦野 ちょっと待つてください。

浦野、立ち上がる

浦野 なんですかそれ。
失くした言葉。
そんなもの探せるわけないでしょ。
大体、今、あなた喋ってるじゃないですか。

高梨 お願いしますね。

浦野 ちよつと。

高梨、退場しようとする。

浦野、引き留めようとするが、封筒を取ろうとしたりバタバタと

浦野 ちよつと、ちよつと。

高梨 やはり、雨が降って来ました。
玄関に置いてあった傘、お借りしますね。

::

浦野 お願いします。
ちよつと。

高梨、退場

浦野、立ち尽くしている

照明、暗転

2

音楽

照明、ゆっくりと明るくなる

上手側のソファーに浦野が座っている

高梨、登場

音楽 TO

浦野、高梨、目が合う

高梨 傘、ありがとうございました。
返しておきましたんで。

浦野 ::

高梨 今日も雨が降りそうです。
古傷がうずきます。

浦野 そうですか。

高梨 今日、自分の傘も持ってきました。

浦野、高梨をソファーに促す

高梨、ソファーに座る

高梨 それで、見つかったんですか。

浦野 ::

高梨 ::

浦野 色々考えました。

高梨 考えた。

浦野 はい。

高梨 考えて、見つかるものなんですか。

浦野 そして、調べました。

高梨 ::

浦野 あなたを。

高梨 何か分かりましたか。

浦野 ::

珈琲、飲みますか。

高梨 いただきます。

浦野、立ち上がり、下手側に行き、珈琲を入れて戻ってくる

浦野 さつき淹れたばかりです。

時間に正確な人で良かった。

高梨 ありがとうございます。

高梨、珈琲を飲む

高梨 美味しいです。

浦野 ありがとうございます。

高梨 ::

で、何か分かりましたか。

浦野 高梨さん。

高梨 はい。

浦野 あなたは、誰なんですか。

高梨 おかしなことを言いますね。

あなたは今、私のことを、高梨と呼びました。

浦野 はい。

高梨 それなのに、高梨と呼んだ私に対して、誰ですかと。

浦野 はい。

高梨 おかしなことを言っていますよね。

浦野 :

確かに。

あなたが置いていった封筒の中に、金と高梨正太郎と書かれた名刺が入っていました。

高梨 ええ。

連絡先は知っておいた方が良いでしょう。

浦野 あなたが高梨正太郎だという保証は、どこにもないと思いませんか。

高梨 なるほど。

ですが、私は、高梨と呼ばれて、「はい。」と返事をした。

だったら、私が高梨たということにはなりませんか。

浦野 わかりません。

わからないんです。

::

いや、俺は、違つと確信しています。

高梨 何故。

浦野 :

勘。

としか言いようがありません。

高梨 なるほど。

それは、確信を持つには十分な理由です。

浦野 :

この前来た時、俺のことを優秀だと言ってくれましたよね。

高梨 ええ。

今もそう思っています。

浦野 恥ずかしながら、俺も、自分のことを、そこそこ優秀だと思っています。

高梨 過不足ない自信は、効率的な仕事をさせてくれます。

浦野、立ち上がり、舞台裏、机がおいてある場所へ

書類を手にとり、見たりする

浦野 高梨さん。

高梨 はい。

浦野 :あなたは、一体、何をしたいんですか。

高梨 失くした言葉を探して欲しい。

それだけです。

浦野 色々考えました。

法外過ぎる金。

意味不明な探し物。

::

きつと、俺とあなたの間には、何かしらの繋がりがあるんじゃないですか。

あなたは俺のことを知っていた。
知っていたのに、さも、誰かから聞いたかのようにここに来た。
何故かは分からない。
でも、ここにこなきやいけない理由があった。
そしてそれは、俺が知らない、俺とあなたとの繋がりの中に、きこえがある。

高梨

::

浦野

違いますか。

高梨

どうでしょう。

私はただ、失くした言葉を探して欲しい。

それだけです。

浦野

違いますか。

高梨

::

それも、勘ですか。

浦野

::

勘です。

残念ながら、勘としか言いようがありません。

高梨

優秀な証拠です。

直感は大事にした方が良いでしょう。

浦野

あなたのことを調べさせてもらいました。

高梨

はい。

浦野

たとえ名刺1枚でも、そこそこのことは分かります。

そういう仕事ですから。

高梨

はい。

浦野

何が分かったと思いますか。

高梨

何も。

浦野

::

ええ。その通りです。

何も分かりませんでした。

高梨

::

浦野

何も分からなかったんです。

何もですよ。

高梨

::

浦野

そんなことがありますか。

あり得ない。

::

高梨さん。

誰なんですか、あなたは。

高梨

::

黄昏時、ですね。

浦野

::

高梨 知ってますか。
黄昏時。

浦野 夕方の時間帯、ですよね。

高梨 ええ。
誰ですか、あなたは。
たそがれどきの語源だと言われています。
夕暮れの、人の顔の識別がつかない暗さになる時間帯のことです。

浦野 ∴

高梨 対になる言葉で、かわたれ時という言葉があります。
夜明け前の時間帯です。
どちらも、太陽の赤さが印象的ですが、
片方はその先に闇が。片方は、光が。
∴

浦野 何が言いたいんですか。

高梨 特に何も。
ただ思っただけです。
どちらも美しいが、とても刹那的だ。
∴
ここへ来る途中に、幸せそうな家族を見ました。
公園で、4歳位の息子さんが、無邪気にお父さんとサッカーボールを蹴っていました。
傍らの木陰には、お母さんが、レジャーシートを広げ、娘さんとしやれていました。
とても幸せそうでした。
黄昏時や、かわたれ時のような美しさはないかもしれませんが、とても美しい光景です。
そう思いませんか。

浦野 思います。

高梨 ですが、直に雨が降って来ます。

浦野 勘ですか。

高梨 古傷の疼きからくる、確信的な勘です。

浦野 あなたがここに来る時は、いつも雨ですね。

高梨 あの家族は、もう家に帰ったんでしょうか。

浦野 分かりませんね。
その家族に古傷があれば、帰ったんじゃないですかね。

高梨 確かに。

浦野 あなたの古傷と、俺は、何か関係があるんですか。

高梨 どうでしょう。
それを調べるのが、あなたの仕事でしょう。

浦野 確かに。
考えて、調べて、決めたことがあります。

高梨 何でしょう。

浦野

::

前にも言った通り、分相応な仕事つてもものがあります。
それを越えた仕事や、人と、付き合つていくつもりはありません。
ですから、この仕事を、お受けすることはできません。
今日は、それを伝えるために、あなたをお呼びしたんです。

高梨

::

雨つて、それほど嫌いじゃないんですよ。
安易な話ですが、色んなものを流してくれるような気がしませんか。

浦野

::

高梨

人にはね、器があると思うんですよ。
人を引つ張つていくとか、そういうことじゃないですよ。
感情の器つて言えば良いんですかね。
器があつて、そこに何かしらの感情が溜まつていくんです。
だからこそ、人は悩みながらも、生きていけるんじゃないかと思うんです。
雨が降ると、器の中の感情が薄まつていくんです。
そして、溢れて、流れ出していく。

そんな風にして、私たちは生きていけるような気がしませんか。
そんな中で、ある時、意図的にしろ、偶発的にしろ、器の中の物を投げ捨ててしまう時があるかもしれない。
いや、あるはずですよ。
でもね、結局、器はあるんです。
器がある以上、時が経てば、またそこには、感情が溜まつているんです。
そう思いませんか。

浦野

わかりませんね。
それも、今、ただ思つたことですか。

高梨

いえ、最近、気づいたことです。

浦野

::

お金はお返しします。
申し訳ありません。
あなたの、失くした言葉を、見つけることはできませんでした。

高梨

::

お金の方は、取つておいてください。
結果に関係ない前金です。

浦野

ですから、

高梨

それに、
あなたは、あなたの中で、この仕事を、まだ終われてないはずですよ。
あなたはもう、刹那的な赤い空に、魅入られてる。
違いますか。
その先が闇なのか、光なのか分からない。
しかし、確実に、赤い空に魅入られています。

怖れているだけです。

浦野 :

高梨 しかし、あなたは、その一歩を踏み出さなければならない。
いや、踏み出したい衝動を抑えられないはずだ。

浦野 :

高梨 安心してください。
決して、やばい仕事ではありません。
あなたの身に、危険が及ぶこともありません。

浦野 本物のような嘘に騙されるか、嘘のような本物に騙されるか。
そういうことですか。

高梨 別に騙してるわけじゃありませんよ。

高梨、珈琲を飲む

高梨 美味しいです。

浦野 冷めていますよ。

高梨 冷めても、十分美味しいです。

珈琲つて、淹れる人の人間性が見えると思いませんか。

浦野 分かりませんね。

高梨、立ち上がり

高梨 また何か分かったら、連絡ください。

浦野 次お呼びする時も、雨ですかね。

高梨 どうでしょうね。

雨は雨で、悪くない。

そう思います。

浦野 高梨さんの器には、どんな感情が溜まっているんですか。

高梨 :

それでは。

高梨、退場

浦野、立ち尽くしている

照明、暗転

音楽

照明、ゆつくりと明るくなる

舞台上、誰もいない

高梨、登場

音楽、FB

ソファ付近に立つ

少しして、浦野、登場

無防備に部屋に入ってきて、ソファ付近に立っている高梨に気づき、驚く

浦野 うわ。

来てたんですか。

高梨 開いていたもので。

浦野 あ、いや、大丈夫です。

高梨 勝手に入ってしまったって、申し訳ありません。

浦野 大丈夫です。

高梨 鍵は掛けたほうが良いです。

浦野 そうですね。

ちよつとそこまでだったもので。

高梨 ::

浦野 気をつけます。

まあ、めつたに人も来ませんし、盗まれるようなものもほとんどないですけどね。

高梨 ::

浦野 ::

ああ、どうぞ。

で、今日は何か。

高梨 特に用はないのですが、近くまで来たもので。

あなたの顔が見たいと思ひまして。

浦野 なんですか、それは。

気持ち悪いですね。

高梨 確かに。

浦野 コーヒー淹れましょうか。

高梨 いや、結構。

すぐに退散します。

実際、それほど時間もない。

浦野 そうなんですか。

高梨 ええ、仕事が立て込んでましてね。

浦野 気になりますね。

いつたい、どんな仕事で、どんな風に立て込んでいるのか。

高梨 あなたの想像と、それほど離れていないとは、言っておきましょう。

浦野 ::

安心してください。

何も想像してませんよ。

高梨 そうですか。

浦野 俺にとっては、すべてが雲を掴むような状況です。
想像しようがない。

高梨 雲を掴むような状況ですか。

浦野 それはそうでしょ。

高梨 そうかもしれない。

浦野 自分の無能さに嫌気がさしていますよ。

高梨 あなたは優秀だ。
それは間違いない。

浦野 ありがとうございます。

高梨 やはり、今日は来て良かった。

浦野 ∴

高梨 確かに、雲を掴むようなものです。
∴
私は、何を掴みたかったのか。
そして、掴んだそのもの自体が、雲みたいなものだったのかもしれない。

浦野 どういうことですか。

高梨 ∴
あなたは何を考えて生きてきましたか。

浦野 は。

高梨 何を考えて、生きてきましたか。

浦野 ∴特に何も。
今日は何を食おう。どこで酒を飲もう。
そんなもんですよ。
∴
俺にすれば、あなたの方が何を考えて生きているのか。
そっちの方が疑問に思えますよ。
どんな感情で生きているのか。
そもそも感情があるのかさえ、疑問に思えますよ。

高梨 人並みにありますよ。

浦野 どうだか。

高梨 ∴
大切な人を守るために必要なものって、何だと思えますか。

浦野 健全な生活。

高梨 面白いですね。

浦野 違いますか。

高梨 残念ながら、違いますね。
どんなに健全な生活を送っていても、不慮の事故は起こってしまいます。
そうでしょ。

浦野 それじゃあ…、

あなたの様な人が好きそうな、お金ですか。

高梨 残念ながら、それも違います。

どんなにお金を持つていようと、人の心を完全に支配したり、管理することは不可能です。

結果、同じように守ることはできません。

浦野 随分と殊勝なことをおっしゃるんですね。

まさか、愛憎だつて言うわけじゃないですよ。

高梨 おかしいですか。

浦野 ::

いえ。

驚きはしていますが。

高梨 残念ながら、愛情でもありません。

浦野 じゃあ、何だつて言うんですか。

高梨 そんなものは存在しないんです。

浦野 ::

存在しないんです。

浦野 ::

高梨 酷い話だとは思いませんか。

浦野 酷い話ですね。

高梨 しかし事実です。

::

我々が生きているこの世界は、悪意に満ちてると思いませんか。

浦野 賛成しかねますが。

高梨 だつて、そうでしょう。

大切な人を守る術のない世界なんて、悪意から創造されてるとしか思えない。

嘆き悲しむために生きていく様なものです。

そんな悪意に満ちた世界で生きるためには、より強く、大きな悪意を持たなければならぬ。

い。

::

より強く、深く、大きな悪意です。

::

それは思いませんか。

浦野 それは思いませんね。

高梨 認めたくないだけだ。

だったら、何故金を受け取つた。

あの金に何の悪意もなかつたとは、思わなかつたはずだ。

::

生きていくためには、より強い悪意が必要なんです。

そうでしょ。

浦野 間違つてる。

高梨 間違つてない。

浦野 間違ってる。
高梨 ∴
浦野 あなたは間違ってる。
高梨 ∴
浦野 ∴
高梨 ね。
あつたでしょ。人並みの感情が。
あなたに反論されれば、むきにもなるし、
人を屈服させたければ、大きな声も出す。
浦野 ∴
高梨 安心してください。
今言ったことは、半分位は嘘です。
浦野 半分位。
高梨 そう思っている部分もあります。
浦野 正直なんですね。
高梨 正直は、良いことですよ。
浦野 俺もそう思います。
そう思って、生きてきました。
高梨 私もです。
浦野 ∴
どこまでが嘘で、どこからが本当なんですか。
高梨 難しい質問ですね。
おそらく、自分でも理解していないんじゃないかと思います。
浦野 ∴
あなたに興味が湧いてきました。
高梨 それは良いことです。
興味は、何よりも効率的な仕事に繋がります。
浦野 ええ。
高梨 ∴
時間です。
今日は帰ります。
浦野 ∴
高梨 連絡もせずに、来てしまって、すみません。
浦野 いえ。
高梨 しかし、来て良かった。
楽しい時間でした。
浦野 何もしてませんよ。
高梨 十分です。
浦野 立て込んでる仕事は、大変なんですか。
高梨 そうですね。

浦野 大変なので、立て込んでるんです。
高梨 そりやそうですね。
高梨 では。

高梨、退場しようとする

浦野 古傷、ありますよ。
さつきから、疼いています。
今日は、雨ですかね。
高梨 そうかもしれないですね。
浦野 どんな古傷か、知りたくありませんか。
高梨 それは、また今度の機会に。
浦野 そうですね。
高梨 ∴
浦野 深い、深い、古傷です。
高梨 誰だつてそうですね。
浦野 古傷は、雨じゃ、流してくれないですよ。
高梨 ∴

高梨、退場
照明、暗転

4

音楽

照明、ゆっくりと明るくなる
下手側で、浦野が電話をしている

浦野 そんなことは百も承知だよ。
高い金払ってんだから、何とかしろよ。
あ。
ふざけんなよ。
分かったよ。
後10上積みするから、何とかしてくれよ。
ああ。
じゃあ、頼むな。

高梨、浦野の電話中に登場し、立って、電話が終わるのを待っている
音楽、EO

浦野、電話を終え、振りかえり、高梨に気付く

浦野 おお。

驚かさなてください。

高梨 すみません。

浦野 いえ。

高梨 どうしても話しておかなければいけないことが起きたので。

浦野 ∴

高梨 突然すみません。

浦野 いえ。

∴

どうぞ。

高梨、座る

浦野 珈琲、飲みますか。

高梨 いただきます。

浦野 お湯沸かさないといけないので、時間かかりますけど、

高梨 かまいません。

浦野、下手側で、お湯を沸かし、珈琲を淹れる準備をする

浦野 何ですか。どうしても話しておかなければいけないことってのは。

高梨 今の電話は、私の事務所の回りを調べてる人ですか。

浦野 ∴

ええ。

まともに調べても、何も分からなかったんで。

まともじゃなく調べても、何も分からないような気がしてますけどね。

どうすれば良いんですかね。

高梨 どうするつもりですか。

浦野 そうですね。

根気ですかね。

高梨 それで良いと思います。

浦野 なので、不本意ですが、人を頼みました。

高梨 そのための準備金です。

しかし、いささか高いような気もしますが。

足りないようなら、少しは置いていけますよ。

浦野 大丈夫です。

浦野、珈琲を淹れる

浦野 そういえば、今日も雨のようですね。

まあ、天気予報の情報ですが。

高梨 ええ。

浦野 少しだけ、あなたが来るんじゃないかと頭をよぎりました。

高梨 昨日の夜も雨でしたよ。

この時期は、毎日あなたに会いに来なければいけなくなってしまう。

浦野 確かに。

::

確かに、俺は、魅入られてるのかもしれない。

刹那的な赤い空に。

今俺は、どっちの時間にいるんですかね。

黄昏時なのか。

かわたれ時なのか。

この先に待つのは、夜の闇なのか、朝の光なのか。

高梨 あなた次第でしょう。

浦野 ::

怖いですね。

浦野、珈琲を高梨に差し出す

高梨 ありがとうございます。

高梨、珈琲を飲む

高梨 美味しいです。

浦野 ありがとうございます。

高梨 怖いのは、分からないからでしょう。

浦野 ::

高梨 その先に何があるのか分からないから、人は恐怖を抱くのだと思います。

夜も、朝も、私たちの生活の中にあります。

決して、怖いものではありませんよ。

浦野 確かに。

そうかもしれない。

::

で、話つてのはなんですか。

高梨 そうですね。

とても話しにくいことなんですが、

浦野 かまいませんよ。

高梨 ::

近いうちに、私は殺されるでしょう。

浦野 ::

高梨 ですから

浦野 ちよつと待つてください。

高梨 ::

浦野 今、何て言いました。

高梨 近いうちに、私は殺されるでしょう。

浦野 ちよつと待つてください。

::

ちよつと待つてください。

高梨 安心してください。

あなたには、何の関係もありません。

あなたに危害は及びません。

浦野 そういふことじゃなくて、

いや、そういうこともありますが

::

どういふことですか。

高梨 そのままです。

私は殺されます。

具体的な理由は言之ませんが、確実に。

遅ければ3ヶ月。早ければ1ヶ月以内に。

ですから、それまでに、何とか探し出していただきたい。

勝手なことを言つて、申し訳ない。

浦野 ちよつと待つてくださいよ。

::

そんなことを、すつと言われて、「はい、そうですか。」つてなるわけないでしょ。

そんなに簡単に整理できるわけないでしょ。

::

どういふこと、いや、何ですか。

高梨 それは言之ません。

言つたとしても、どういふなる話じゃありませんし、言う必要がないことです。

単純に、私の問題だということです。

浦野 ::

何でそんな冷静でいられるんですか。

高梨 :: 冷静そうに見えますか。

浦野 とても。

高梨 そうでもありませんよ。

::

もし冷静に見えるのだとしたら、こゝに来て、こゝを待つて、あなたと向かい合つてゐるこゝ
とが、私の心を穏やかにしてくれてるんだと思います。

浦野 　　：
高梨 　　：
浦野 　　俺とあなたの間には、一体何があるんですか。
高梨 　　言えません。
浦野 　　そうですね。
　　　　　それを、調べてるんですもんね。
　　：
高梨 　　怖くないんですか。
　　　　　言っただけでしょう。
　　　　　分からないから、怖いんだって。
浦野 　　でも、死ぬことは、生活の中には無いでしょう。
高梨 　　確かに。
　　：
浦野 　　不思議ですが、受け入れているんでしょう。
高梨 　　俺には、わかりません。
浦野 　　ええ。
浦野 　　：
高梨 　　話したかったことは、以上です。

高梨、珈琲を飲む

高梨 　　うん、美味しい。
浦野 　　どんな味ですか。
高梨 　　そうですね。
　　　　　迷いがなく、真つ直ぐな感じですかね。
浦野 　　ありがとうございます。
高梨 　　帰ります。

高梨、立ち上がり、退場しようとする

浦野 　　もし、
　　：
　　　　　もし、あなたが死ぬ前に、見つけることが出来なかつたら。
高梨 　　：残念ですね。
浦野 　　もし、見つけたとして、それが違つものだつたら。
高梨 　　：それもやはり、残念に思うでしょうね。
浦野 　　：
　　　　　絶対に見つけます。
　　：
　　　　　絶対に見つけますから、

高梨 あなたの、失くした言葉を。
楽しみにしています。

高梨、退場しようとする

浦野 きつと、

::

きつと、俺にも大切なことなんですよね。

高梨 ::

浦野 あなたの失くした言葉は、俺にとっても、失くした言葉なんですよね。

高梨 ::

浦野 違いますか。

高梨 優秀ですね。

浦野 そこそそ優秀だと思っはいます。

高梨 十分に優秀ですよ。

浦野 また会えますよね。

高梨 あなた次第です。

浦野 確かに。

高梨 では。

浦野、立ち上がり

浦野 ちょっと待ってください。

高梨 ::

浦野 ::

高梨 何か。

浦野 ::

傘を。

傘は持ってきましたか。

高梨 いえ。

浦野 すぐに雨が降って来ます。

疼いてませんか。

俺は、疼いています。

きつと、すぐに雨が降って来ます。

傘を持って行ってください。

高梨 そして、返しに来いと。

浦野 ::

高梨 今日は濡れても良いかなと思っています。

::

浦野 何を薄めたいんですか。

高梨 ……
浦野 この前言ったでしょう。
感情の器があるって、
雨が薄めてくれるって。
どんな感情を薄めたいんですか。
高梨 ……
浦野 恐怖なのかもしれませんね。
高梨 ……
浦野 死なないでください。
高梨 ……
浦野 無理でしょうね。
浦野 ……
浦野 それでも、死なないでください。
高梨 ありがとうございます。

高梨、退場
照明、暗転

4

音楽

照明、ゆっくりと明るくなる

下手側のソファーに浦野が座っている

高梨、登場

音楽、FO

浦野と高梨、目が合う。

しばし見つめあう。

高梨 間に合ったようですね。
ありがとうございます。
浦野 どうぞ。

高梨、ソファーに座る

浦野、下手側に珈琲を取りに行き、取ってからソファーに戻る

高梨 ありがとうございます。
浦野 ……
高梨 ……
見つけられましたか。

浦野 近藤保（たもつ）さん。
高梨さん、あなたの本当の名前ですね。
：
そして、近藤智（さとし）さん、近藤美保（みほ）さん、近藤智美（ともみ）さん。
あなたのお父さんと、お母さんと、妹さんですよ。
：
私の父が殺した。

高梨 ：
浦野 いつからですか。
高梨 浅間大輔さん。あなたの本当の名前ですね。いや、どちらも本当の名前か。
昔の名前と言った方が良いでしょうね。
浦野 ：
いつからですか。
高梨 ずっと昔からです。
浦野 そうですか。
高梨 お父さんは元気ですか。
浦野 分かりません。
あれ以来、会っていません。

高梨 ：
浦野 殺されるのは、…俺ですか。
高梨 怖いですか。
浦野 不思議ですね。
俺も、受け入れてしまってます。
高梨 殺されるのは、私です。
君じゃない。
浦野 でも、
高梨 君は、真面目に頑張ってきて来ました。
何故殺されなければいけないんですか。
浦野 恨んでないんですか。
高梨 ：
浦野 うちの親父に、家族を殺されたんですよ。
恨んでないわけがない。
：
俺は、俺は何をすれば良いですか。
高梨 君は、お父さんを恨んでいますか。
浦野 …恨んでいます。
高梨 どうしてですか。
浦野 親父が起こした殺人事件で、俺の人生は全て変わってしまった。
恨んでないわけがないでしょう。
あなただって、そらでしょう。

高梨 人生が変わるなんてことはありませんよ。
何が起ころうと、生きてきた時間だけが、人生です。

浦野 ::

高梨 そうでしょう。

浦野 ::

うちの親父のことを、尊敬していました。

親父と同じ、警察官になりたいと思っていました。

うちの親父は、真面目さだけが取り柄の、ごくごく普通の警察官だと思っていました。

裕福ではないけれど、そんな父を誇りに思い、幸せな家族だと思っていました。

高梨 その通りです。

浦野 そんなわけないでしょう。

::

あんな事件を起こしたんだから。

そんなわけないでしょう。

高梨 君のお父さんから、手紙をもらいました。

浦野 ::

高梨 私の父は、一般人とは名ばかりの、ヤクザの様な人間です。

本物のヤクザの人たちにも、相当に顔が利いていたようです。

私たち家族は、そんなことは少しもわからず、幸せな家族だったんです。

父は、そういった部分を、家では、絶対に見せることはありませんでした。

ですが、私は、父の商売に疑問を抱いていたし、きつと、何かやばいことをしているに違いないと感じていました。

我々に心配をかけたくなかつたのか、そつちの方が都合が良かったのか、今となつては知る由もありませんが、そういった、表面上には見えない、二重構造の家だったんです。

::

君のお父さんは、私の父にはめられたんです。

君のお母さんは、病弱だったんですよね。

浦野 はい。

あの事件が起こる、少し前に死にました。

高梨 君のお母さんは、保険不適用の大きな手術をしなければいけませんでした。

つまり、お金が必要だったんです。

そこを、私の父に利用されました。

警察にはたくさんの情報があります。

知りたいことは山ほどある。

君のお父さんにお金を掴ませて、情報を引つ張つたり、隠蔽したり、

大体想像つきますよね。

浦野 ::

高梨 しかし、君のお母さんは、手術に間に合うことなく、亡くなってしまった。

それと同じころに、私の父は、君のお父さんより、上の立場の、もつとたくさんの情報と力を持った人間と繋がることができました。

君のお父さんは用済みです。
それで終わっていただければ良かった。
私の父が新たに繋がった男がやばかった。
目的もなく、ただ金が欲しい小心者だったんです。
小心者は、絶対、どこかでへまをおかします。
そいつは、自分の保身のために、君のお父さんを売ろうとしたんです。

浦野

::

高梨

罪を犯してまで奥さんを助けたいと思っていたのに、奥さんを亡くして。
その上更に、犯罪が明るみに出て、君にも迷惑がかかる。
それだけは避けたかったんでしょう。
お父さんは、私の父に救いを求めました。

浦野

::

高梨

父は、君のお父さんに何の恩義も感じてません。
そういう人間ですから。
にべもなく、追い返されたそうです。
それでも諦めずに、事務所から父の後を尾けて、家に辿り着いたんです。
君のお父さんは、家以外の父の顔しか知りません。
ごくごく普通の、幸せそうな、私の家を見て、家の中の父の顔を見て、どんな感情が起
るのか、
想像に難くありません。

浦野

手紙に書いてあったんですか。

高梨

そうです。

浦野

手紙の内容を信じるんですか。

親父は、自分の都合の良いように書いていただかもしれない。

高梨

君のお父さんは、そんな人ではありませんよ。

浦野

::

高梨

決して褒められたことではありませんが、ただ金が欲しくて、贅沢しただけで、罪を犯
したわけではありません。

浦野

何で言いきれるんですか。

分からないじゃないですか。

::

あなたは、その手紙を読んだからと言って、全てを許せるんですか。

うちの親父と、あなたのお父さんとの間のことはともかく。

あなたは、お母さんと、妹さんまで殺されてるんですよ。

高梨

::

浦野

許せるんですか。

高梨

不思議に思うかもしれませんが、君のお父さんのことは、それほど恨んでいないんです。
父のヤクザのまがいの仕事の上になり立っていた家族だということもあります。
君のお父さんじゃなく、寧ろ誰かが、同じ事件を起こしたかもしれない。
うちの家族は、誰かの不幸の上で、成り立っていたんですから。

∴

母と妹に思うことは、一緒に死ぬなくて、申し訳ないという気持ちです。

私だけが、たまたまその場に不在で、生き延びてしまったことに対する、謝罪の気持ちだけです。

あの時、私も一緒に死ぬべきだったと。

浦野 あなたは、何で殺されるんですか。

高梨 血筋ということを理由にしたくはありませんが、私も、父と同じように、反社会的な仕事をしています。

浦野 そのようですね。

高梨 より大きな悪意に呑み込まれてしまった、弱い人間です。

浦野 ∴

高梨 簡単に言えば、仕事で下手を打った。それだけです。

浦野 ∴

高梨 安心してください。君とは、全然関係がない世界での話です。

浦野 ∴

何で俺に会いに来たんですか。

高梨 ∴

ちょっと前にね。

家を見に行きました。

まあ、もう家はないんですけどね。

整地されていて、雑草が勢いよく生えていました。

殺人事件があった場所ですからね、なかなか売れないんでしょう。

空き地を見ていたら、君に会おうと思いました。

何でそう思ったのかは、わかりません。

浦野 ∴

俺は、あなたに、どんな言葉を、話せばいいんでしょうか。

俺には、あなたに話す、言葉がわかりません。

あなたに連絡をとってから、ずっと探していました。

ですが、見つけることができません。

高梨 ∴

お父さんが、亡くなるそうです。

癌だそうです。

早ければ1ヶ月。もつても3ヶ月。

浦野 親父に会ったんですか。

高梨 ええ。

浦野 親父は何で。

高梨 私と、君のお父さんの間のことです。

浦野 ∴

高梨 少し羨ましく思いました。
私はもう、母とも、妹とも、話すことはできません。
また間に合らなから、あなたは、おとうさんとの言葉を失くす必要はない。
私はそう思います。

浦野 ∴

高梨、ポケットから封筒を取り出し、テーブルに置く

高梨 もう、会うことはないと思います。

ありがとございます。

浦野 ずるいですよ。

高梨 ∴

浦野 ずるいです。

高梨 そうですね。

ずるいですね。

何で君に会おうと思ったのか。

君のことは昔から知っていました。

君が、どんな目にあつて、その中で、一生懸命生きてきたことも。

∴

勝手な話ですが、同じ古傷を持つ、同士の様な気すら抱いたことがあります。

だからこそ、君が、真つ直ぐに生きてきたことが、嬉しく思えました。

私が汚れていったからこそ、君が真つ直ぐに、一生懸命生きてきたことが、嬉しく思えました。

浦野 あなたにとって、俺が、あなたの善意の象徴だと。

高梨 そうかもしれない。

鏡に映る姿が、君であつて欲しいと思つていたんでしょ。

浦野 迷惑です。

高梨 そうですね。

浦野 そんな迷惑です。

高梨 ∴

高梨、珈琲を飲む

高梨 ∴美味しいです。

高梨、立ち上がり退場しようとする

浦野 近藤さん。

高梨 高梨で良いですよ。

その名前は捨てたんです。

浦野 近藤さん。
俺は、あなたの失くした言葉を見つけることが出来たんですか。

高梨 報酬は、成果がなければ、もらえないものです。

浦野 ∴

高梨 近藤か。
久々に、その名前と呼ばれましたよ。
変な感じですね。

高梨、退場

音楽

照明、舞台後方を赤く染める

浦野、舞台後方、赤く染まった空を見る

s. c. 銃声

浦野、外を気にする

照明、ゆっくりと暗転